

# なかむら講演—活発な討議

吉田武雄

## 講演のあとの討議

### 〔質問と意見〕

司会：片岡（新潟）講演について質問からどうぞ。

吉田（新潟）：青年とのコミュニケーションは例にだされた金髪の若者の音楽など文化的活動が有効と思うが、いかがでしたか。

なかむら（講師）：私が答えるより、討論の中で出し合ったほうがいいのでは。

河合（新潟）：講演にあった金髪の青年とは違う金髪青年の例だが、ケーキを作って持参した。誰かが不注意でそのケーキの箱を崩した。数十分もショックを耐えるようにじっとしていた。ナイーヴなんですね。でもその後受験生の勉強部屋を確保する班の中心になって活躍した。なかむら：若者に対してわれわれは毛嫌いしていたきらいがあるようだ。接してみると、ナイーヴで人なつこい。元自衛

講演のレジюмеは次のとおり。

1、まえがき

2、青年たちについて

その① 深夜到着の高校生

その② 金髪の青年の愛車

その③ チラシを撒く大学院生

3、作家たちの感想

4、こうして私の学んだこと

青年たちの人生探し

「ありがとう」に「ありがとう」

青年成長の始まり

大人はもっと大胆に語るべきだ

5、ある経験

第一番目のメモ

第二番目のメモ

その後の孫の言葉

6、人間賛歌の詩を

\* \* \*

討議は、「若者論」が中心になり、新潟県中越大地震のなかで青年たちが、いかにいきいきとボランティア活動をしていたか、その背景や意味を探求。

それとかかわって、研究所がこれから彼らとどのようにつながり、研究所の活動にどうすれば参加してもらえるかを考えるものになりました。

隊員がパソコン持参でセンターに来た。救援センターは力仕事もさることながら、物資の配分などパソコン利用のワークも大切。彼は自衛隊の救援の仕事はあとに何も残らない、更地のようにして帰ると比較して意義を見いだしていた。

共産党の救援センターは長岡市に一箇所、川口町、小千谷市に分所のような形であった。私たちは行政も地震被害者とみて接した。協力関係はうまくいった。行政側は融通無碍には動けない性質がある。その隙間を私たちがうめる役を果たした。例えば物資の分配システムがない。物はたくさん来ているのに。

中、高校生が学校やクラス単位でボランティアに来たのは見聞していない。家の人と一緒にきた。他に労組が大阪から来たが、行政は受け入れ態勢がない。党のセンターに来るしかなかったようだ。堀尾（民主教育研究会）この本のタイトルに日本共産党救援センターとあるのは、

自慢話をしないということからも、普及という点からまずいのは。他の救援センターも登場させ、ボランティアの青年に焦点を当てたら、さらによかったのではないか。

河合：救援には公明党もきたが、規模が小さくセンターの機能は弱かった。一月四日に学校が再開されるが、被災者に体育館を占拠されていた、県立立大手高校の生徒たちが、被災した子どもらを面倒みているのは感動的だった。自主的だったという。

東（石川）：じまん話をするなどいうのに共感する。教育相談をセンターでやっているが、相手が喜んだという例を話しても自慢話になる。肝に銘ずべきだ。

春日（愛知）：福井の海の油汚染のときや阪神大震災のボランティアも若者の可能性を発揮する機会になった。愛知からも多くの若者が参加した。その経験を継承していない。

馬島（長野）：町田市の高校生の殺人事件に見られるように、彼らが何を求めているかが把握できない。阪神大震災のボランティアに行くときのうれしそうな若者の姿を想うにつけ、彼らからよく聴いておくべきだったと思う。子どもの権利

条約12条の意見表明権は発言や文章化できない思いをも聞くべきだという精神ゆえに、そのように対処してゆきたい。山上（滋賀）講演の「ありがと」に「ありがと」はいかに日常生活では他人から感謝される機会がないかを物語る。他人に役立つことをして喜ばれるのは人間的な特質だ。学校ではわずかに部活動や異年齢集団における活動で発揮されるくらいが現状だ。

山岸（長野）：根源的なものは自主的自発的なもの云々」は教育の最重要の要素だ。研究所が教育提言をだして、県の教育委員と懇談した。教育長は「教育で一番大切なことは、自主性で、自分の頭で

考えること」と述べた。その言は評価したい。しかし議会で彼の選任案が否決された。

生源寺(岐阜)：「根源的なもの…」は教育実践のうちに具体的にどう現すか、特に教基法第1条、2条に関わって。

「科教協」にハシモトイタルという人がいて地学の先生だが、阪神大地震の跡を隠れるようにして小さなカメラで撮った。あの地震は午前5時台におきたが、一番早く活動したのは一晩中たむろしていた青年たちだった。助けた人達に感謝されて彼らは感動したという。

いま私は大学院生で若者たちと接触がある。こちらから彼らの周波数に合わせるように努めることが大切。なかむらさんはよく合わせたと思う。

考えてほしいことは、いま中学3年生は阪神大震災のとき4歳だった。先にあげた街の地質学者、ハシモトさんは中一、二年と持ち上がった彼らに幼児の震災

体験が影響しているのでは?と聞いている。そのような視点で追跡調査をもっと早く自覚的にやるべきだったという。作家の目と教師の目で新潟県中越地震と子どもを見たらいいのでは。

馬島：なかむらさんのそと孫が、とび職のアルバイトで変わる話があったが、学校の競争原理から職人の協同の關係のなかでひらかれたものと思う。

なかむら：膨大な資料があつて読みきれぬものでない。ボランティアに何で来たのか、そこでどう変わったか、に焦点を当てた。じまん話でなく、できるだけ若者の形象化に努めた。私の孫のケースはその応用問題とみた。

適時に彼の体験を5か条に、まとめて与えた。彼はそれを壁に張つて生かしたようだ。ボランティアに参加した人がこの本を読みその体験を整理してもらつたという感想が多かつた。自主性・自発性が変化を生む基礎といえる。

藤田(新潟)：小千谷市教育委員会の地震で何が変わったかの調査では、家族の絆が強まった、がトップ。自主性抜きでは子どもの成長はないといえる。その点で教員は彼らと対話ができていないか、少な過ぎる。震災の大変化のなかで引きこもりの青年たち十数人と対話して変化を調べた。非常に多様で个性的である。ただ途中に興味本位になつていて自分には気付き、またある極限状況に追い込まれた体験を評価すると、戸塚ヨットスクールのようになる恐れがあると思ひ中断している。

本田(新潟)：中越大震災については民主教育研究所と共同研究の緒が付き、ようやくアンケートを依頼しているところだ。

堀尾(民主教育研究所)：それはいままで細いパイプだったが、この機会にいろいろ伺つて、多様な課題を見いだした。震災など子どもが経験を通してどう変わる

のか興味が尽きない。

吉田：地元の9条の会の呼びかけ人になり若者にどう伝えていくかを今春以来考えてきた。つい最近、美術史研究者の若桑みどりさんの「あなたは戦争を知っているか」という講演をきいた。映像、音楽、浪花節まで使って、心に響く内容だった。わたくしたちも多様な媒体で若者の耳だけでなく胸に届く努力をした

い。

堀尾：終わりに、広島の中学生在が作り、いまや30カ国にも訳されて歌われている歌の4番だけ歌います。

♪もしもひとつだけ願いがかなうならば／戦争棄てて世界に愛と平和を／この願ひかなうまで／わたしたちは歩み続けることをやめないだろう♪

司会：積極的な発言がつづき、司会が文通整理の要もない熱心な討論になりました。以上で閉会します。

(文責・吉田武雄・研究所員)

## トリノ・オリンピック

今年のトリノの前半はあと一歩のところでメダルに届かないこともあったが、日本の選手がいずれの競技でも振るわず、見ていてもどうせダメだろうと、さき思ってしまう。

スノーボード・ハーフパイプなどは、アメリカの選手とは最初から水準が違いました。そんななかで、若い山田メロ選手は敢えてアメリカの水準に近い演技をしようとしたのだろう、最初から果敢に難しい演技に挑戦して転倒してしまつた。水準の低い演技を成功させてもあまり意味がなかったかもしれない。スノーボードの関係者は、アメリカの水準を知らないで、自信をもってでかけたものらしい。いまどきでもそんなものかと

思ってしまう。

カーリングなどは、見てもルールがさっぱり分からない。しかし、さほど体力はいらなそうだし、ブラッシュで石の進路をこするなど、子どものころやった遊びと同じ精神だ。オリンピックは所詮遊び精神の延長であることにはちがいない。スピード・スケートや陸上競技でただ走ったりすることも、子どものかけっこと同じだと考えてもいいわけだ。しかし、子どもに限らず、遊びには、厳正なルールと平和が絶対条件である。

また、オリンピックは、国別対抗ではなく、基本的には、選手個人の不断の努力と練磨の集積という意味で感動をよぶわけだから、勝った選手には国の区別なく賛辞をおくるべきだが、それでも、日本のアスリートが表彰台にあがって、勝ち誇って顔をくしゃくしゃにしてよろこぶ姿は格別なのである。

(Y)